

第9回日米協会国際シンポジウム

2014年9月6日(土)

於 札幌コンベンションセンター

参加学生による感想文

札幌大学

倉 健太 (英語専攻2年)

今回の国際シンポジウムへの参加は、自分の知らない世界・文化を持っている人と関わることは、知見と視野が広がり、同時にそれら文化を、伝聞ではなく、実際に現地で体験してみたい、そう思える良い機会になりました。

アシスタントモデレーター兼若者側としてグループディスカッションに参加して、国際交流の先駆者とお話をさせていただいたことで、自分が井の中の蛙で、まだまだ大海を知らないのだと実感しました。いただいた言葉のなかで、特に心に刺さったのが「日本人は外国文化を理解しようとするけれど、自文化（あるいは自分の考え）を伝えることを躊躇しがちに感じる」というものです。日本人は国民性、もしくは文化性から、他人との協調を重んじてしまい、積極的といっていないほど、個ではなく集団を形成することを是とする、というような話がでて、受け身で関係をもつことも時には必要であることは事実としても、ポジティブに自分の意見を言うこと・疑問があれば即時呈すること、このふたつが重要だ、と改めて認識できました。

私が参加したグループでは、日本の教育にも言及していました。英語教育のために割かれた時間のわりに、なかなか被教育者の英語へのバイアスがとけず、英会話に尻込みしてしまう、ただ、それならばバイアスのすくないうちに教育すればいいか、というところでもなく……自身が参加している（しようとしている）社会にたいする知識・理解が浅いうちに、交流のために異言語、それも体系の離れた言語を（強制されるかたちで）学ぶのは難しい。外国語として学ぶ場合は、まずは自文化についてしっかりと学ぶべきだ、と。耳と心が痛い話でした。

また、このグループにおいて十代・二十代の「若い」人たちが軒並み日本人だったのもあってか、議論の中心になったのが「非若者」だったのは、上記から想像に難くないと思いますが、今回のこのディスカッション、ひいては日米協会国際シンポジウム全体から、私達若者が物怖じせず、議論の中心に入り込んでいく必要性を、これまで耳にしてきた以上に感じられたので、まずは自分から、という気概を得られたことが、私にとって一番の収穫でした。

この度は素晴らしい経験をさせて頂き本当に有難うございました。

私はこの様な文章に慣れておらず、失礼な言い方になってしまうかもしれませんが、私の気持ちが少しでも伝えられたら幸いです。

私が参加させていただいたテーマ2のディスカッションでは、私が1番歳が若くて、参加者の方たちは道外や国外から来られた年輩の方たちばかりでした。皆さん自分の地域をととても誇りに思われているように感じました。

ディスカッションでの問題点として上がった事で印象的だった話が二つほどあります。まず一つ目は大学生の時に沢山、国際交流活動に参加しても、大学を卒業してから就職をして働くようになってしまうと忙しいこともあり、またいつも近くにあった環境からも離れてしまい、大学生の時に持っていた興味やモチベーションがだんだん薄れていってしまうこと。また二つ目は地域が呼びかけていても、地域の人々や企業に、外国文化や語学に対する関心を上手く広げられないこと。この二つが私の中では印象的でした。

モデレーターを引き受けた時から小笠原先生を中心としてシンポジウムに参加するメンバーと進行の方法やシンポジウムの内容について沢山学び合いました。私は当日、学んできたことにより、自分がその時に出せる力を最大限に引き出せたと思います。しかし、今思えば、私がもっと努力して、もっと学ぶことに時間を費やしていたら、モデレーターとしてディスカッションをより良いものに出れたのではないかというもどかしさも感じます。

これから小笠原先生のもとでもっと沢山の事を学び、能力を高めていつかまた、この様な機会がいただけるのならベンジをしたいです。そう思えるくらいに今回のシンポジウムは私の中で大きな経験となりました。大学生のときにしか出来ないチャンスがこれからも沢山待っていると思います。その時に私はどのくらいそのことへ力を注げるのかとても不安です。しかし、シンポジウムで経験をさせてもらった事を自信にして挑みます。この様な機会を作ってください、本当にありがとうございました。

9月6日に開かれた日米協会国際シンポジウムに札幌大学代表の一員として参加させて頂きました。

札幌大学では、小笠原先生の指導のもと、シンポジウム本番でうまくグループディスカッションが進行できるよう、また、テーマについて掘り下げた話し合いができるよう、勉強会を重ねました。この勉強会で、本番前ではありますが、自分の中で得られたものが沢山ありました。同じ大学とはいえ、初めて顔を合わせる人が多く、勉強会において、お互いの意見を交換したり、反論したり、共感してきたことで夏休みという短い期間ではありましたが、相手がどういった考えを持っている人なのか、少しでも仲間の人間性を知ることができた深い時間を持つことができました。

この勉強会を終えたあとに、リハーサルに臨み、次は初対面の高校生や社会人の方とディスカッションをするという初めての経験をさせて頂きました。リハーサルといえども、とても緊張しましたが、始まって数分でグループメンバーの笑顔に後押しされて、自分の意見を話すことができました。共通の趣味を持った方もいて、気持ちが楽になり、思ったことを素直に自信を持って発言でき、充実したひと時となりました。

シンポジウム本番、私はグループディスカッションで、アシスタントモデレーターをやらせていただきました。会場の広さや人数の違いもあったため、戸惑いもありました。せっかく深くて良いお話をされているのに聞き取りづらく、そしてそれを初対面の方にどのように伝えたらいいのかと悔しい場面もありました。「声を大きくしてください」と言うだけのことなのですが、私はとても難しく考えてしまいました。そんなことをいったら、自信をなくしてしまう人もいるのではないだろうかと考え、とてもいいにくかったです。そこで私は、少しでも周りに良い影響を与えられればと思いながら、自分自身の声を大きく、はっきり発言すること心がけました。すると、その後は話が上手く進んだような気がして、嬉しかったです。

このシンポジウムを通して得たことが沢山ありました。今まで経験したことのない、初対面や国の違う人との意思疎通はとても難しいことでもありますが、簡単なことだとも思えるようにもなりました。そしてあらたに、「外国人」ではなく「そこにいるヒト一人の個性」だという考えも見出すことが出来ました。

このような素晴らしいイベントに参加させて頂いたことを、感謝いたします。ありがとうございました。

今回の日米協会国際シンポジウムは実際に異文化にふれることができとても良い刺激となった。参加することで何よりも日本の事について初めて真面目に考えることが出来た。一番気になったのはアメリカへの留学者の減少である。私はこの事について、二つの視点を考えてみた。

一つ目は、日本の教育である。現代の日本は他国と比べると英語能力、特にSpeakingに関して劣っている。最低でも三年間は学んでいるわけでそれなりに英語を使えてもいいはずだ。しかし、それが現実になっていないのは「日本人だから英語が出来なくたって大丈夫」と様々な人が口にするように若い世代に英語の必要性が感じられていないからだろう。（私もそうでした...）しかし世界はグローバル化しており若い世代はその事をしっかりと把握し、英語の重要性を認識出来るような場が必要だ。そのために、小さなうちから同世代の留学生やALTと異文化を共有出来る場を増やして欲しい。未来のリーダーに外国との楽しい思い出を作ってもらえるような機会をもっと設定してほしい。

二つ目は、メディアや社会的な視点である。現代人の情報ツールはほとんどがメディアを通したもので若者からするとリアリティがないのではないか。それが、「外国との政治」となるとさらに関係ないと考えてしまいがちだ。また日々の外国のネガティブな情報は興味から恐怖へと変わってしまう。メディアが全てではないとわかっているにもかかわらずやはりこのようなことばかりだと外国に行きたいと思わなくなってしまう。社会活動が身近にないぶんだけ、異文化に興味を持つきっかけが少なくわかりづらい。

以上の二点から留学する人が減少しているのではないかと考える。しかし減少すればするほど日本は国際社会から遅れをとってしまう。そうならないためにも小さな頃から、そして大人になってからも異文化と交流出来る場をもっと増やして行ってほしい。異文化がもっと身近なものになってほしい。それにより日本文化、日本人らしさも再認識出来るのではないか。

シンポジウムは外国を知ることが出来ると同時に日本について日本人ではなかなか気づけないことを知る機会となった。日本はいい国だと沢山の人が言ってくれているが、いい国で終わりたくない。しっかりとした文化経済政治の基盤を持ちつつ、グローバル化にうまく対応し、日本ならではのといわれるような国に今まで以上に変化しなくてはいけないと実感した。

『リンゴーン。』ワークショップ開始のチャイムが鳴る。

正直に言うと、私がこのシンポジウムに参加したきっかけは、三浦雄一郎氏が講演に訪れるからというミーハーな理由だった。そんな私がワークショップのモデレーターになり、恋するフォーチュンクッキーを舞台上で踊ることになり、バスでホテルにVIP参加者を迎えることになり…三浦雄一郎氏にお会いすることも楽しみにしていたが、いつの間にかそれ以上に楽しみになっているものが増えていた。思い返してみると、このようなディベートに参加することは、初めてだった。ただ単に意見を言えばいいというものでもなく、「自分の意見をいかに簡潔にはっきりと相手へ伝えるか」ということがどれだけ難しいことなのかを痛感した。だが、難しいからこそ、やりがいがあり、悩み、苦しむ価値があるのだと、今回の経験を通し、知ることが出来た。

私はシンポジウムに参加した二日後からとある企業のインターンシップに参加したが、そこでこんな話を聞いた。「今時の就活生は、よく自分のコミュニケーション力を生かしてサークルの部長をやったとか、学校でこんな活動を率先してやったとかアピールするけど、同年代の間でやったことなんて、コミュニケーション力とは言えない。本当にコミュニケーション力がある人というのは、お年寄りから子供まで、年齢に関係なく相手に合わせて話すことのできる人のことを言うのよ。」この話を聞いたときに、真っ先にシンポジウムのワークショップのことを思い出した。国籍も、年齢も違う人たちが集い、一つのテーマについてじっくりと話し合う。もちろんこれからの若者の日米交流はどうしたらいいのかというのが主題だが、一種のコミュニケーション力を養う場だったとも言えるのではないだろうか。現にシンポジウムで得た経験が、インターンシップとは言え、仕事をするうえで生かされたことが沢山あった。シンポジウムというのは、あくまでも通過点であり、終着点ではないのだ。この貴重な経験を通して、私はどう変われるのか、自分で自分にわくわくしている。

私の中のワークショップ終了のチャイムはまだ、鳴らない。

萩生田真伍（文化学部3年）

国際シンポジウムでは当日だけでなく、練習の時からよい経験をさせてもらいました。国際シンポジウムに参加しようと思ったのはただの興味だけで何かをしたいといったものはまったくありませんでした。ですから、最初の練習の時には自己紹介をするのにも恥ずかしさがあり、上手くできず、自分の考えを多くの人の中で発表するのも大変でした。しかし、練習を重ねていくうちに今自分がおかれている状況や立場というものを感じるようになり、今まで持っていた羞恥心を捨て、真剣に国際関係の事を考え、他の人の考えを聴き、それを自分の中に取り入れ、自分自身の考えというのを持ち、自分の口から発表できるようになりました。これが今回の国際シンポジウムで自分が一番進歩したことだと思います。そして、これからの課題と学ぶべき重要なことを見つけました。課題は、言語を身につけることです。学ぶべき重要なこととは、誰かがそうやって考えているから私はこう考える、ではなく、自分の考えというものをしっかりもつということです。様々な人の話やプレゼンテーションをきいて痛感しました。

国際関係と言うと、国単位の大きなものとして考えてしまうことがあります。この国の人はいかような人間だ、というようイメージを持ってしまうと、偏見にもつながります。そうではなく、個人を大事にし、どのような国の人でも同じ人間だから、人としての付き合いができる人間が増えれば、お互いの国を理解し会える国際関係が生まれると思います。そのためにも多くの人々が自国を飛び出したり、国際シンポジウムのような様々の国の人が集まる所に積極的に参加したりすることが大事であると考えます。もっともっと、他国と他文化に対する興味や関心をもつ人を増やしていきたいです。

このシンポジウムへの参加を通して、大変なこともたくさんありましたが、それよりも新たな発見、楽しさがあり本当によい経験になりました。ありがとうございました。

洪ハヌル（文化学部4年）

今年9月6日、日米の国際シンポジウムに参加して多くのことを感じました。最初、小笠原先生から募集案内があったとき、せっかくの留学生活なので、国際交流のイベントに参加するのもいい勉強になると思っていました。しかし、いい勉強どころか、シンポジウムやそのための勉強会をとおして、これまで会ったこともない、いろいろな人たちと交流し、自分の考えを話したり、相手の考えを聞いたりして、自分が大きく成長できた、忘れられない勉強になりました。

特にリハーサル練習の際、テーマ1の「両国の若者たちができる両国の相互理解や関係強化」について話したとき、私は最初、アメリカと日本の若者たちができることについて考えていました。しかし、周りの方からのアドバイスを受け、私は日米だけでなく韓国と日本、米国および中国の若者ができることに何があるのかについて考えるようになりました。ありとあらゆることに思いを巡らせましたが、そのときは明確な答えがでませんでした。しかし、シンポジウム当日、そこに参加した方たちと一緒に話す中で、私たちに何ができるのかがわかりました。それは簡単なことでした。今、私たちがやっているように、お互いが考えていることを話しあい、共に時間を過ごすことによって、友だちになるのです。

それは若者たちが一番たやすくできることでしょう。しかし、お互いの言葉が違って困ることがあるかもしれません。その時には、お互いに通じるテーマを決めて話せば、問題ないと思います。実に私は国際シンポジウムが終わって皆と家に帰るとき、シンポジウムに参加した外国人の友だちができました。彼はインド人で、インターナショナルスクールに通う高校生です。名前はロハン。ロハンは日本語が少しできますが、ほとんど英語で話すので、私はてこずりました。でも、お互いに通じる点を探して話した後、いつからかロハンと私は友だちになりました。

シンポジウムに参加して本当に良かったと思っています。初めての国際舞台で、緊張しましたが、パネリストのグレン・フクシマさんに質問ができましたし、さまざまな国の人たちの意見も聞けましたし、美味しいお弁当も食べましたし、新しい友だちもできました。シンポジウムのおかげで、世界についてもっと深く考えることができました。これからもこのような機会があれば、ぜひ参加したいです。そして、今よりもっと多くのことを勉強して、他の人たちに教えてあげたいです。

ありがとうございました。

私は在日中国人留学生として今回の日米国際シンポジウムに参加しました。ある意味で第三者の立場からアメリカ、日本両国の関係を見詰めたこととなります。しかし、私は決して「見る」のみの第三者ではありません。今回の大会で、日米関係を中心に勉強したことで、日中関係・米中関係を見直すチャンスも得られました。

私はアシスタントモデレーターとして地域における国際交流活動というテーマのディスカッションに参加しました。グループの皆さんは国際交流のメリットと自分が経験した活動を挙げて、存在する問題点をはっきり指摘しました。一番深刻な問題は資金とスタッフ不足です。国際活動は公益活動として、一般的に入場料は無料ですが、活動を準備するため莫大な資金が必要です。そして、ボランティアスタッフも不足していると述べられました。この二つの問題の解決は今後の国際交流活動に深く関わっています。一方、ボランティアスタッフの主力集団となる若者の国際問題意識の薄さも大会のテーマとして出席者たちの注目を集めていました。自分は若者の一員として、国際関係に対して興味を持っていますが、地域における国際交流活動の情報はほとんど得ていないことを実感しています。今回の活動も小笠原先生が教えてくれたので参加できましたが、もし学校という場から離れたら、国際活動の情報も一層遠ざかっていたと思います。大人社会に属するものとイメージされた地域の国際交流活動に若者を参加させようとするなら、まず情報を伝えることが大切だと考えます。

そして、午後の講演を聞いて、日米関係を再認識できました。その中で、フクシマ氏の講演がアジア国際関係に触れました。一番印象に残ったのは「中国は歴史に拘りすぎる」という話です。私はこの点について考えました。確かに、日中関係には歴史に拘りすぎるくらいはあるかもしれませんが、しかし、問題の核心は歴史ではないと思います。繰り返して歴史を強調するその背後には今の時点でうまく解決できない国益に関する問題があるのではないかと考えます。もし、今の国家利益関係を順調に処理できれば、歴史は過去の歴史として存在できるようになると考えています。

今回の活動に参加する前に、国際関係というのはただニュースに載っている記事として、自分との距離がとても遠いものだと考えていました。しかし、今回のシンポジウムを経験して、なるほど、国際社会は自分のすぐそばにあると気づきました。そして、現時点で国際交流における解決すべき問題を認識し、自分もある程度、客観的に国家関係について考える思考力を持ちたいと思えるよいきっかけになりました。留学生としての私はもっと理性的、かつ真剣に国家関係に注目して、国家関係の発展を促進するささやかな力になりたいと思います。

今回日米国際シンポジウムに参加できて、光栄であると同時に、少し複雑な思いもしている。中国人留学生の私は、日米関係について、はっきりとした意見は持てない。しかし、日米関係は、実は日米のことだけではなく、国際社会の関係そのもの、そしてその根底は、人間関係そのものである。国の立場から離れて同じ人間として、自分のことや、自分が悩んでいること、自分が好きなことをいろいろと話し合うことによって、お互いをよりよく理解することができるのではないだろうか。そうしているうちに、いつか「真のパートナー時代」が必ず来るだろう。

今回のシンポジウムではいろいろな人と face to face で一緒に話し合うワークショップがあったが、時間が足りないくらいだった。話したい話題はあるけれど、最初はみんな、縛られたみたいにあまり自分から質問を出さない。しばらくして、いよいよ深い話ができそうになったときに、時間になった。その時私は改めてこの日米国際シンポジウムの意味を考えた。日米国際シンポジウムはみんなと一緒に仲良く話し合う場ではなく、仲良く話し合う場を作るための発端である。これが、自分が今回の日米国際シンポジウムで一番勉強したことである。伊藤義郎会長ともお話をさせていただいたが、国際シンポジウムは本当に良いプログラムだが、残念ながら日米以外に他の国はやっていない。いつか日中、日韓、中韓、中米…もっと多くの国がこのようなワークショップを行うのであれば、国際社会という大環境をも変えることができるだろう。

パネリストの先生たちの Presentation にも特別なものがあつた。私の小さい頭の中は、天馬が空をゆくように、さまざまな想像が駆け巡り、聞きたいことが山のようにでてきた。Dr. Matthew C. Perry に、どうして野生生物学者なのにペリーの研究をするようになったのか。Dr. William R. Farell に、日米両国は理解を深めるための努力が必要だと言ったが、その努力は具体的にどのような努力ですか。Mr. Charlie Hales に、札幌の姉妹都市 Portland が素晴らしいところだとわかったけれど、そんな素晴らしい Portland に留学させるために何かプログラムがありますか。Mr. Glen S. Fukushima に、未来の国際環境に対して楽観的な立場をとっていますが、どうしてそう言えるのですか、と。次から次へと聞きたいことがでてきたが、それを問う間もなくシンポジウムは終わった。その質問の答えは自分で探さなければならないのかもしれない。

麦シユン (文化科学研究科1年)

先学期に、今回のシンポジウムに参加しませんかと小笠原先生からの誘いがあった、大イベントを間近に経験できるチャンスだと思い、札大の留学生として参加させていただきました。それからワークショップの進め方やパネリストの論文資料の読み込みなど、皆で勉強会をして、大変有意義な夏休みを過ごす事ができました。外国人の前で、分かりやすく自己紹介をする練習はきちんとやったことがないので、新鮮だと思いつつ、どうやったら人前でもう少しく話しが出来るのかを考えるのは、めったにない経験でした。

ワークショップで私は通訳さんの付きグループにいました。ボランティア通訳さんたちのプロぶりを見て、自分も英語をもうちょっとがんばればよかったと思うぐらい、流暢な英語がしゃべれる彼女たちを羨ましく思いました。

私のグループでは、相手の国の印象やこれから目指す国際関係などについて語り合いました。グループには韓国人、日本人、米国人そして私、中国人がいて、最初はこれをまとめるのはかなりの難しいところがあるのではと心配していましたが、モデレーターのハルヌさんが見事にまとめてくれました。さすがです。「日米両国の若者達が出来た両国の相互理解や関係強化に貢献できる事は何かと思いますか」のテーマについて、一番印象深かったのは「私達は相手国の人と交流する前に、まず自分の語学レベルを心配して、もうちょっとうまく話してから交流活動を始めようという考え方をしてしまうのですが、語学レベルなどに気にせず、まずは友達になってからでも、全然大丈夫です。」といった意見がありました。私もまったく同感で、思わず自分の経験談とあわせて意見を述べました。

とてもいい雰囲気の中、まだまだ話したかったのですが、ワークショップが終わり、お昼をいただきながら聞いたヒマラヤの話がまたすごかったので、本当に想像を超えた素晴らしい一日となりました

このような交流活動に参加できたことを大変嬉しく思っております。また、大変勉強にもなりました。「もうちょっと英語をうまく話せばいいな」と思っていて、悔しかった気持ちもありつつ、自分の語学レベルがもう一段上にあがるよう、今後も勉強に励んでいくつもりです。

大変有意義な日々をありがとうございました。